

パラフィン切片を作製した。免疫染色は、モノクローナル抗牛デコリン抗体 (3B3) を用い、peroxidase antiperoxidase (PAP) 法にて行った。

《結果》0週、および2週齢では、デコリン抗体に対する弱い反応が円板、および結合部にわたってみられ領域差は顕著でなかった。4週齢では、反応性が全体的に強くなり、特に、前方結合部と後方結合部で強い反応が認められた。8週齢では、中央狭窄部と後方肥厚部の中央部での反応性が弱く、前方と後方結合部で中等度の、前

方肥厚部と結合部間で強い反応がみられ、領域による反応性の差が顕著であった。16週齢では、8週齢と同様の領域差が存在したが、さらに反応性の亢進がみられた。

《結語》ラットの顎関節円板におけるデコリンの局在は、加齢に伴い増加傾向を示し、また、その領域差が顕著になることが明らかとなった。これらの変化は、顎関節に生ずる複雑な生力学的力を反映していることが示唆された。

23. 唾液腺腫瘍の腺管構造部の三次元的観察

○定岡 敏之, 西村 学子, 大内 知之,
安彦 善裕, 坂倉 康則*, 賀来 亨

(北海道医療大学歯学部口腔病理学講座, *北海道医療大学歯学部口腔解剖学第一講座)

《緒言》唾液腺組織は、腫瘍化した場合様々な像を呈することが知られており、細分化された診断名を、ルーティンの病理診断の方法のみでは、確定することの困難なことが多い。確定診断のために、これまで組織化学、免疫組織化学的染色、および電子顕微鏡による観察などが行われてきたが、いずれも一切片による2次元観察のみであり、3次元的に腫瘍の構造物を観察した報告はみられない。唾液腺は、文字どおり腺組織であることから、腫瘍化したものに腺管様構造物のみみられることが多いが、その形態も様々である。本研究では、唾液腺腫瘍の腺管様構造物の3次元構造を明らかにするため、主に共焦点レーザー顕微鏡による観察を行った。

《材料および方法》材料には、pleomorphic adenoma (PA) とsalivary duct carcinoma (SDC) と診断された症例の切り出し時の残組織を用いた。いずれもマイク

ロスライサーによる100 μ m切片を作製の後、Triton Xによる処理を行った。1次抗体として抗ケラチン抗体 (DAKO社製) を用い、4 $^{\circ}$ Cで5日間インキュベーションを行い、PBSによる洗浄の後、FITC標識2次抗体で2日間インキュベーションを行った。その後、速やかに切片を共焦点レーザー顕微鏡により観察した。

《結果および考察》PAでは2層性構造を示す腺管様構造物は、隣接するもの同士の吻合が観察された。SDCのintraductal proliferationを示す腺管様構造物には吻合がほとんど確認されず、充実性の腫瘍胞巣中に腺管が孤立して存在していることが示唆された。

以上のことから、共焦点レーザー顕微鏡による3次元観察は免疫組織化学や電子顕微鏡と並んで、唾液腺腫瘍の診断の一助になるものと考えられた。

24. Superoxideによるマウス・マクロファージ細胞株J774.1の運動能亢進はPKCを介する

○中村 公則, 田中 真樹, 萩野 司,
奥村 一彦, 金澤 正昭

(北海道医療大学歯学部口腔外科学第一講座)

《目的》マクロファージ ($M\phi$) は、様々な刺激により活性化しSuperoxide (O_2^-) を含む活性酸素を産生する。われわれは、癌細胞の運動能が O_2^- によって促進されることをすでに報告した (Cancer Res., 1995)。そこで、 $M\phi$ 自身の細胞運動能も O_2^- により促進されることの仮説を立て、 O_2^- による運動促進機序を検討した。

《方法》細胞は、マウス由来 $M\phi$ 細胞株J774.1を用いた。 $M\phi$ の活性化はPMA (1 mg/ml) で刺激し、 O_2^- はHypoxanthineとXanthine oxidaseにより産生させた。 O_2^- 産生量はcytochrome C法により測定した。細胞運動能は金コロイドを用いたPhagokinetic track assayにより評価した。Protein kinase C (PKC) 活性は、Amersham